

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：17201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25590214

研究課題名(和文) グローバル人材育成に資する多文化交流型授業のフレームワーク構築への挑戦

研究課題名(英文) Towards Developing a Framework for Co-learning in Multicultural Classrooms to Contribute to a Globally Oriented Human Resource Development

研究代表者

高橋 彩 (TAKAHASHI, AYA)

佐賀大学・国際交流推進センター・教授

研究者番号：10326788

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は外国人留学生と日本人学生がともに学ぶ多文化交流型授業の概念的な枠組みを国際的な視点で検討したものである。オーストラリア、イギリス、韓国、日本における現地学生と留学生が学ぶ授業を含む教育実践やそれを取り巻く状況の調査および考察を通じて、多文化交流型授業の開発・改善には、その授業を取り巻く前提、すなわち教育潮流、各大学の教育の方針、科目の位置づけ、留学生数と授業環境などを含む授業の設定環境・条件の検討が重要であることを示した。

研究成果の概要(英文)：The research here attempts to study the conceptual foundations and a framework for co-learning in multi-cultural classrooms with international and Japanese students studying at universities in Japan from an international perspective. Through the research and studies of Australian, British, Korean, and Japanese cases, this project showed the importance of consideration of a range of conditions surrounding the multi-cultural classroom when planning and improving courses, including the conditions and patterns in education in the various countries, educational goals and purposes followed by the universities, the position and roles of individual courses provided, the number of international and Japanese students in a course, and other aspects of the educational settings in which the courses are taking place.

研究分野：国際教育

キーワード：多文化交流 国際教育 高等教育 国際研究者交流 オーストラリア イギリス 韓国

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、留学生と日本人学生がともに学ぶ多文化交流型の授業の枠組み開発への挑戦を行ったものである。昨今のグローバル人材育成の潮流では国際性の涵養のため、海外留学だけでなく、国内での異文化交流、特に外国人留学生との交流が推奨されており、交流の効果も指摘されている\*。

しかし、授業の実質化における学習時間数の確保や GPA 制度の導入などから、課外活動の時間での交流にはある意味で制約があり、また課外活動への参加はあくまでも任意のもので、学生の自発性や志向に依拠したものである。留学生と日本人学生が、正課の授業の中で、異なるものから真に学び合うことができないかという問題意識が本研究の背景にあった。

留学生と日本人学生が同じ教室で学ぶことは様々な形ですでに行われてきている。しかし、同じ教室内で学ぶことだけでは、必ずしも真の交流が生まれる環境にあるとは言えない。また、英語で学ぶ授業における共修でも言語能力の制約のため、十分な「交流」の促進にも課題がある。真の交流からの学びには工夫が必要である。

任意の課外活動に依拠せず、言語の壁を乗り越える方策を模索したいという考えが、本研究の出発点にある。つまり、授業という枠の中で、また日本語を媒介語として、日本人学生と留学生がともに学ぶ場を設定し、その中で彼・彼女らがお互いから学び合うことを意図し、構造化した学習の場を設けることはできないかという問いである。

日本において、外国人留学生と日本人学生がともに学ぶ授業は日本語教育や日本事情教育、あるいは異文化理解関連の授業の中で取り込まれてきた。本研究では、言語教育や留学生教育、あるいは異文化理解やコミュニケーションという特定の内容の授業群だけではなく、授業のコンテンツに関わらず適用可能な多文化交流型授業を開発するための共通の基盤を模索することであった。

\*中川かず子「日本人学生と留学生の異文化交流-異文化接触、協働的活動を通じた大学教育への適応と意識変容」『ウェブマガジン「留学交流」』2012年4月号, Vol.13, pp.1-10 など

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、外国人留学生と日本人学生がともに学ぶ多文化交流型授業のフレームワーク構築を試みることである。授業を通して、異なるもの同士が実質的な交流を通して学び合う構造を持った授業を開発・提供するための提案を行う。

理論研究と実践から、必ずしも異文化理解やコミュニケーションを主題としない多様なコンテンツの授業に異文化理解と多文化共生を目標とし、交流から学び合う教育を盛り込むことを想定した枠組を提示し、国際教育

交流の実質化を目指すものである。

### 3. 研究の方法

本研究は、教育の枠組み構築を試みるため、オーストラリア、イギリス、韓国、日本の先行事例や政策・教育潮流等の調査を行った上で、研究者・実践者間の議論をあわせて行った。そこから、学問分野やコンテンツにかかわらず学生同士の授業内での「交流」から学ぶ構造を持った授業の提供・開発に資する知見や考え方をあぶり出す方法をとった。

#### (1) 先行事例・取組み・研究の調査

2013年度は、オーストラリア、イギリス、韓国における類似の取り組みの調査および関連研究者等からの聞き取りやそれらの人々とのディスカッションにより、海外の先行事例や蓄積された知見を調査した。また、日本においては、主に先行事例の文献調査、政策動向調査等を通して、日本の状況と教育潮流、実践蓄積の把握を行った。

これらの調査では、各国で類似の先行事例が実施された環境や在り方、教育潮流が異なること、調査対象が必ずしも類似の授業の実践者だけでなく、広く教育学や日本語教育等の専門家も含まれること、さらに当研究に参加する研究者の専門分野が様々であり、調査方法の共有や協力者へのアプローチに限界があることから、調査は探索的なものとし、事例や関係者との議論を幅広く設定した。各調査については後述の冊子(高橋他2015)で報告されている。

とくに、オーストラリアの先行研究・実践事例\*\*については、当初、ここで示された方法の日本への応用可能性を模索、検討する対象とした。

#### (2) 本研究の取組みの発信および議論

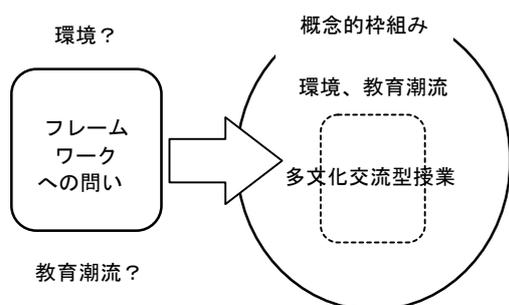
2013年には国際シンポジウムを開催し、多文化交流型授業を考える趣旨のもと、オーストラリアでの取組みの紹介と研究分担者の鄭(2013)、山田(2013)による授業実践の報告、参加者との議論を行った。このシンポジウムは、本研究過程の一部であり、検討の機会提供とそれまでの成果報告という点では研究成果の発進という意味も持っていた。なお、シンポジウムにおけるオーストラリアでの先行事例は、青木(2014)により紹介されている。

また、研究代表者、分担者が集まり、各自の調査の報告、実践や専門分野での知見を交わしながら、概念的枠組みを継続的に議論した。

本研究では、当初、初年度に「ガイド冊子」案を作成し、2年目に実践とともに検証、内容を再検討する予定であった。しかし、これらの調査から、本研究が目指す「フレームワーク」とは何かを問い直すことが必要であることが課題として浮かび上がってきた。

留学生と日本人学生の交流を促す授業に

においては、実践に使える教授法や学習方略そのものの検討よりむしろ、環境や設定、前提が重要であることが明らかになった。よって、2年目はこの前提を中心に据えて引き続き考察し、また、授業実践を行っている研究者は、その実践における振り返りも共有しながら考察を進めた。具体的には、最終的に作成する冊子の目次を検討する作業を通して議論を重ねることにより、概念的な枠組みの検討を行った。



\*\*Sophie Arkoudis, et al., *Finding Common Ground: Enhancing interaction between domestic and international students, guide for academics*, 2010.

#### 4. 研究成果

##### (1) 主な成果

本研究では、オーストラリア、イギリス、韓国、日本での調査から当該国や対象教育機関の状況や事例を紹介することを通して、この種の授業の前提となる要素をまとめ、また授業実践を通して、その方策を検討した。

オーストラリアの調査からは、先行する取組みを中心とした調査から、すでに国籍や言語、文化背景、年齢の異なる学生が集まるオーストラリアの文脈における現地学生と留学生の交流型授業における「交流」の意義を認識することになった。ここからは、現地学生と留学生の交流型授業を行うという点で共通性はあっても、その授業のおかれた社会状況や目的によって、ことなる前提あるいは概念的枠組みを検討する重要性があぶり出された。よって、当初検討していた先行事例の日本への応用が困難であるという認識を持つに至ったが、その提示方法や考え方については有益な示唆を得た。

イギリスの調査では、後述の冊子の中で紹介されている通り、交流型の授業の必要性をあらためて問うことになった。これは、当研究における「多文化交流型授業」が日本の環境、国際的人材育成の文脈に置かれていることをあらためて確認する視点を得ることであった。同様に、韓国の調査では言語学習の一環として先進的なICT教育が取り入れられており、韓国の大学の置かれた社会状況・文脈での共修は、日本とは異なることと同時に、主な学習目的によっても異なることが確認

された。

授業の実践からは、留学生と日本人学生の交流行事を組み込んだ授業実践の方法、ICTを活用したコミュニケーションによる専門コンテンツの学習など、様々な方策が提示された。また、これらの交流を促す方策は、既存のアクティブ・ラーニングやICTを活用し、学習者間の交流を促す教授法が適用可能であることがわかった。しかし、多様な学生とは何か、留学生と日本人学生の教室内比率のコントロール、交流が学士力等育成にどのように関わっているかなど、いくつかの論点が浮かび上がってきた。

本研究の成果として、これらの調査や当該研究者らによる議論をまとめ、多文化交流型授業の開発者および提供者の参考となる冊子(高橋彩、青木麻衣子、山田智久、小河原義朗、鄭惠先「留学生と日本人学生がともに学ぶ多文化交流型授業を考える」(2015年3月)を作成した。冊子では、本研究であぶり出された論点を国際的な視点で整理しつつ、日本の環境における留学生と日本人学生の共修の意義、授業計画を考える上での当該授業の位置づけの検討の重要性等を示唆し、この種の授業を計画・検討する上でのポイントを示した。

本冊子は、留学生と日本人学生の共修授業を行っている研究者・教授者、あるいは広く関心を持つ国際教育の実践者向けに作成されたものである。ここでは、授業設計のためのマニュアルではなく、多文化交流型授業のデザインに資する概念上のポイントが提案された。

さらに、当研究に参加する研究者が単独あるいは共同で、ICTを活用した授業実践、協働学習からの学び、多文化交流型科目の制度設計の実践と課題等、教育実践および理論研究を通して得た成果を論文、学会等で発表した。(たとえば、鄭2013、山田2013、小河原・鄭2015、小河原・鄭・山田2014)。

##### (2) 本研究の位置づけ

本研究は、日本人学生と留学生の共修の意義の検討を通して、日本における国際教育の知見の蓄積に貢献するものである。日本人学生と留学生が日本語でともに学ぶ際の概念的な検討から、国際教育における「共修」の意義および大学や当該国(この場合日本で)の社会潮流中での位置づけを検討する重要性を提示した。

また、実践的な視点からの検討は、アクティブ・ラーニングやグループ学習等、既存の教育方略の異文化間教育における有用性の提案の意味も持っている。実際、多文化交流型授業の実践を通して、すでに教育方法の分野で開発、普及されている多様な教授法・学習方法を使った教育が有用であることもわかった。

日本語教育の一部としての異文化交流型授業の国内外での実践例の紹介や概念的枠

組みの提案は、日本語教授者に対する日本語母語話者と日本語学習者との共修授業の検討の際、参考になるものと考えている。コンテンツベースの日本語学習の事例提示となっているからである。

さらに、多文化交流型授業への日本での取り組みは、高等教育の国際化の中で、現地学生と留学生、あるいは文化・言語背景の異なる学生の学びをめぐる日本の事例の紹介と国際比較の視点からの検討として、高等教育のグローバル化をめぐる研究にも貢献するものである。

### (3) 今後の展望

本研究による概念的・実践的なポイントの提案から、今後は、当概念について、実践を通じた再検討を重ねていく必要があるだろう。同時に、様々な研究者・教授者による実践を通じた批判的検討がなされることを望む。また、個別の事例研究のさらなる蓄積によって、留学生と日本人学生が実質的に交流するための授業計画作成へのヒント、効果的な教授法などの具体的な方略が提案されることを期待している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### [雑誌論文] (計3件)

- (1) 高橋彩「多文化交流型授業における『交流』の意義を考える」『留学生交流・指導研究』Vol.17、2014年(印刷中)(査読有)
- (2) 青木麻衣子「オーストラリアの大学における授業内での国内学生・留学生の交流促進の取り組み：Sophie Arkoudis講演解題」『オセアニア教育研究』第20号、2014年、18～26ページ(査読無)
- (3) 青木麻衣子「オーストラリアの教育におけるダイバーシティ・マネジメント研究の可能性」『オセアニア教育研究』第19号、2013年、12～26ページ(科研該当は一部分)(査読無)

### [学会発表] (計5件)

- (1) 小河原義朗・鄭惠先「参加者企画セッション 留学生と日本人学生がともに学ぶ多文化交流型授業の実践」第21回大学教育研究フォーラム、京都大学(京都)、2015年3月14日
- (2) 小河原義朗・鄭惠先・山田智久「大学における『多文化交流科目』の制度化と促進-留学生と日本人学生がともに学ぶクラスを中心とした有機的な学内連携-」2014年度日本語教育学会秋季大会、富山国際会議場(富山)、2014年10月12日

- (3) 山田智久「日本語教育における効果的なICT活用～北海道大学多文化交流科目での取り組みから～」平成25年度日本語教育機関教員と高等教育機関留学生教育担当者との研究協議会、日本学生支援機構東京日本語教育センター(東京)、2014年3月1日
- (4) 鄭惠先「協働を重視したグループ活動の試み-オンラインとオフラインをつなぐ-」科学研究費補助金「グローバル人材育成に資する多文化交流型授業のフレームワーク構築への挑戦」・オセアニア教育学会(第17回大会)共催国際シンポジウム、北海道大学(札幌)、2013年12月7日
- (5) 山田智久「持続的な関係構築を目指した協働学習の試み」科学研究費補助金「グローバル人材育成に資する多文化交流型授業のフレームワーク構築への挑戦」・オセアニア教育学会(第17回大会)共催国際シンポジウム、北海道大学(札幌)、2013年12月7日

### [その他]

- (1) 冊子発行  
高橋彩、青木麻衣子、山田智久、小河原義朗、鄭惠先「留学生と日本人学生がともに学ぶ多文化交流型授業を考える」2015年3月

## 6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
高橋 彩 (TAKAHASHI Aya)  
佐賀大学・国際交流推進センター・教授  
研究者番号：10326788
- (2) 研究分担者  
青木 麻衣子 (AOKI Maiko)  
北海道大学・国際本部留学生センター・准教授  
研究者番号：10545627  
山田 智久 (YAMADA Tomohisa)  
北海道大学・国際本部留学生センター・准教授  
研究者番号：90549148  
小河原 義朗 (OGAWARA Yoshiro)  
北海道大学・国際本部留学生センター・准教授  
研究者番号：70302065  
鄭 惠先 (JUNG Hyeseon)  
北海道大学・国際本部留学生センター・准教授  
研究者番号：40369856